3/12 シイタケ応援看板を設置

興田中3年デザイン

興田中（吉田靖雅校長、生徒77人）の3年生20人は、地元産シイタケを応援する看板を興田浄化センターに設置した。

生徒は2013年度に絵手紙を作成した。14年度はカレンダーを地区の文化祭で販売。今年度は、大東椎茸産業推進協議会と市も協力して看板を制作した。

生産者の岩渕謙一さん（66）と佐々木久助さん（61）は「若い世代の応援は励みになる。これからも最善を尽くしたい」と力を込めた。

小野寺寿男さん

大東椎茸産業推進協議会会長

おのでら・ひさお
市の露地栽培原木シイタケは現在も国の出荷制限が続く。生産者はホダ木を処分し、ホダ場を除染。再生産に向けて準備を進めている

思いは一つ、シイタケ産地の再生

「近所」の精神を体現

復興最前線「陸前高田市」を後方支援

沿岸部は、津波によって想像を絶する被害を受けた。市は、震災直後から隣接する陸前高田市に消防隊や保健師などを派遣した。11年度には、災害復旧調査や水道復旧などを担当する職員12人を陸前高田市に派遣。12年～14年度は、同市に11人、気仙沼市に2人の職員を派遣し復興を支援している。

大東町大原の千葉紀和さん（40）は、同市役所民生部長寿社会課で生活福祉の仕事に励んでいる。「全国からの派遣職員が陸前高田市の早期復興に力を尽くしている。息の長い支援が必要。心の復興を後押ししたい」と前を見る。

急ピッチで復興が進む同市では、気仙大橋南側「奇跡の一本松」周辺に、主塔の高さ約40㍍、塔柱間が220㍍の巨大なベルトコンベヤーの吊り橋「希望のかけ橋」が設置されている。山林部で掘削した土を高田松原地区や高田沖の被災農地などに搬送し、復興を後押しする。沿岸の空には復興の槌音が響いていた。

1_遺構が津波を今に伝える／2_「希望のかけ橋」が復興を加速／3_BRTが住民の足を支える

千葉紀和さん

陸前高田市役所民生部
長寿社会課主任

ちば・のりかず
2013年4月に大東支所産業経済課から陸前高田市役所へ支援職員として派遣。生活福祉の業務に携わる

寄り添いながら、心の復興を願う

3・11 あの日を忘れない

3/8 教訓を生かした防災について理解を深める

防災フォーラム

「防災フォーラム」（市・NPO法人防災サポートいちのせき主催）は3月8日、川崎公民館で開かれ、自主防災組織の会員ら約200人が東日本大震災の教訓を生かす防災活動について理解を深めた。市では3月11日を「となりきんじょ防災会議の日」と定め、防災意識の普及の一環として開催した。

フォーラムでは、岩手大学工学部の山本英和准教授が「東北地方太平洋沖地震を振り返り防災リーダーの必要性を考える」と題して講演した。山本准教授は東日本大震災での例を挙げ、「大規模災害が発生すると行政のできることも限られる」と指摘。「自らを守る自助、地域が助け合う共助が大切」と呼びかけた。また、市内で詳細な震度調査を実施したデータを基に「地盤の固さは、地域や場所によりさまざま。緊急地震速報が発表されたら、第一に身の安全を確保すること」と話し、自然災害に対する備えの大切さを訴えた。

講演終了後には、災害に強いまちづくりに取り組む「みんなの安心の会」（槻山チエ会長・会員20人）による寸劇が上演され、参加者は防災への意識を新たにしていた。

1_地域防災の課題と防災リーダーの必要性について学ぶ参加者／2_「みんなの安心の会」が寸劇で防災活動の必要性を伝えた

3/17 大切な地域の宝を未来へつなぐ

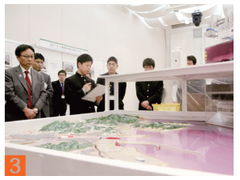
国連防災世界会議で文化財の防災を考える

「第3回国連防災世界会議パブリックフォーラム」（岩手県主催）は3月17日、ベリーノホテル一関で開かれ、海外や国内の文化財や防災の研究者ら約160人が文化財の防災について考えた。

専門家による講演では、土岐憲三立命館大学教授が「過去の歴史を学び、自然災害や人的被害から文化財を守り、次世代につなぐことが大切」と呼びかけた。ムニル・ブシナキ世界遺産アラブ地域センター長は「文化遺産は自然災害や紛争で大きな被害を受けている。破壊から守るために歴史を学ぶ機会が必要」と教育の重要性を訴えた。

「世界遺産平泉における防災」をテーマにしたパネルディスカッションでは、文化財の価値を考えながら、身近な存在である文化財と地域住民の関係の在り方、官民が連携した備えの必要性を確認し合った。

会場には、陸前高田市の街並みを復元した模型や震災に関する資料を展示。宮古工高の生徒は作成した模型で津波を再現し、参加者に震災の様子を伝えた。



3_模型で津波を説明する宮古工高／4_文化財保護の課題を話す土岐教授／5_歴史教育の必要性を訴えるブシナキセンター長

困っている人に差し伸べる手が「希望のかけ橋」になる

私たちの「使命」と「役割」

東日本大震災の発生から4年。全国では、今なお約23万人が避難生活を続け、原発事故では約4万6千人が福島県から県外に避難している。

思うように進まない住宅の再建、地域経済の再生、地域のつながりなど、暮らしの再建は道半ばだ。

市内では、3月11日を中心にさまざまな取り組みを実施した。被災した人たちの悲しみや苦しさを思いやること。一日も早い被災地の復興を願うこと。自らのつらい体験を振り返ること。震災の記憶を後世に伝えること―。

共通しているのは「あの日々の記憶を忘れない」という気持ちだ。

あのとき、私たちは何を思い、どのように行動しただろう。互いの無事を祈った。残された食べ物を分け合った。寒さに震え、身を寄せ合った。「当たり前」の日常を取り戻すため、がむしゃらになって毎日を過ごした。

沿岸被災地をはじめ、震災の傷跡は深い。まだ、日常を取り戻せないでいる人は大勢いる。人と人とのつながり、お互いさまのありがたさなど、普段忘れがちな「縁」や「絆」の大切さを再認識しよう。

今も支援を必要としている人がいる。私たちは震災の記憶を風化させてはならない。

近い所が助ける―。

近助の精神が復興を加速させる。今の私たちに課せられた使命と役割は、身近な人を思い、手を差し伸べることだ。それこそが、希望をつなぐ、かけ橋となるのだ。

さあ、あなたも希望のかけ橋をかけよう。「当たり前」の日常を取り戻すために。